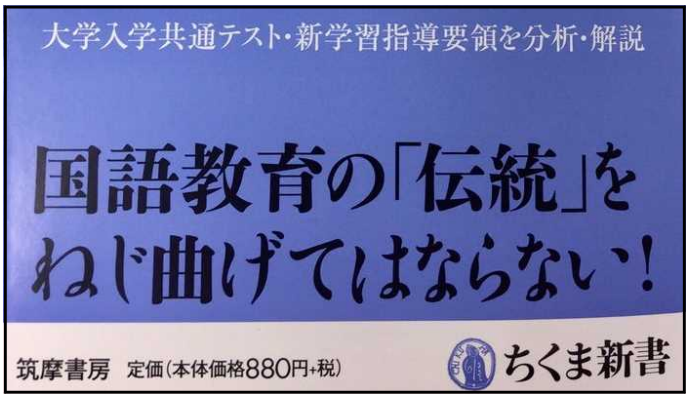
これからの「国語科」の話をしよう！

2019 年 1 月 13 日　大妻女子大学

広島大学附属福山中高等学校　古田尚行

■『国語教育の危機』の帯の文言について



国語教育の「伝統」をねじ曲げてはならない！

■『国語教育の危機』（傍線は引用者）

第５章　プレテストの分析２

小説というジャンルの強みは、仮に語り手自身が登場人物となる一人称の小説であったとしても、登場する複数の人物の会話をはさむことによって、語り手の主観だけではとらえきれない他者の思いや意識、無意識を描き出せるところにあります。会話とは「他者の言葉」なのだというのは、ロシアの文芸学者ミハイル・バフチンの言葉ですが、誰かが繰り出した会話の言葉がときに「わたし」をおびやかし、ときにリフレインのようになって「わたし」の口からも発せられます。しかし、そのとき発せられた言葉は同じ意味ではなくなっています。こうした差異を見出だすように促すことは、優れて小説の解読へと導いていくことになります。さらに同じ言葉を用いながらもまったく違う意味になってしまう、現実のこの社会でしばしば見られる「言語活動」への思慮深いまなざしを生むことにもなるでしょう。小説を読むとは、本来こうしたことではなかったでしょうか。（222 頁）

第６章　「国語」に力をとりもどす

「同じ基準」による採点の厳密化を目指せば目指すほど、「正確に採点することが可能な問題」作りが必須となります。しかし、そうなれば、「正答の条件」をシンプルにして条件の組み合わせも分かりやすくしていかなければなりません。それは結果的に高い正答率となり、試験問題としての「識別力」において効力がなくなります。採点しやすくすることは記述式問題において問題の意義を小さくすることになってしまうのです。これではかける労力にまったく見合いません。

つまり、「大学入学共通テスト」における記述式問題の導入は、導入するという目的のためにのみ行われるものであって、選抜試験としての役割を果たしていませんし、「国語」の能力開発にも直接、結びついていません。壮大な実験を行い、結果的に国語教育を危うくすることになると思います。

それよりも、実際の「国語」の授業のなかで、記述式問題の要素を増やしていく、あるいは「思考力・判断力・表現力」の育成を目指して、小論文形式の課題をとりいれる方がはるかに効果的でしょう。私立高校で中高一貫の進学校は、多く中学から高校への移り変わりのときに、卒業論文や卒業制作などの課題を与えたりしています。公立の学校でも中高一貫校が増えていますが、そうであるならば、教育課程のなかに記述式や小論文を加えていけばいいのです。（256-257 頁）

複数の資料をまたぐと「統合的な思考力」が育つというのも、きわめて安直な発想です。記述式の問題は採点がしやすいように、限られた場所にいくつかの要素がちりばめられているだけで、その場所を見つければ簡単に答えは出てきます。語句を結びつけて文を作り上げ、文同士の関係を副詞や接続詞でコントロールしていく文章力は生まれるかもしれませんが、それは高校の定期試験などでも十分可能ですし、むしろ、いくつかの私立高校がすでに実践しているように、高等学校の卒業前に卒業レポートを作成させることを必修にしたならば、大学入学前に十分に力がつくのではないでしょうか。そうしたそれぞれの現場を、それこそ「統合的」に組み合わせれば獲得可能である能力を、なぜ「大学入学共通テスト」でやらなければならないのか。気の遠くなるような高額の税金と大量の人的投資をかけてまで。（276 頁）

■高１、『荘子』「渾沌」（本文引用は『漢詩・漢文解釈講座』による）

南海之帝ヲ爲シテ儵ト、北海之帝ヲ爲シテ忽ト、中央之帝ヲ爲ス二渾沌一。儵ト與レ忽、時ニ相與ニ遇フ二於渾沌之地一ニ。渾沌待スルコトヲ之甚ダ善シ。儵ト與レ忽、謀リテ報ヒンコトヲ二渾沌之德一ニ曰ハク、人皆有リテ二七竅一、以テ視聽食息スル。此レ獨リ無シレ有ルコト。嘗ミニタントヲ試レ鑿之。日ニ鑿チ二一竅一ヲ、七日ニシテ而渾沌死ス。

【書き下し文】

南海の帝を儵と為し、北海の帝を忽と為し、中央の帝を渾沌と為す。儵と忽と、時に相与に渾沌の地に遇ふ。渾沌之を待すること甚だ善し。儵と忽と、渾沌の徳に報いんことを謀りて曰はく、「人皆七竅有りて、以て視聴食息す。此れ独り有ること無し。嘗試みに之を鑿たん。」と。日に一竅を鑿ち、七日にして渾沌死す。

【通釈】

南海の帝王を儵といい、北海の帝王を忽といい、中央の帝王を渾沌といった。儵と忽とが、ある時渾沌の支配する地で出会った。渾沌はたいそう手厚く二人をもてなした。儵と忽とは、渾沌の好意に報いようと相談して言った。「人には（目、耳、鼻、口の）七つの穴があって、それで見たり、聞いたり、食べたり、呼吸したりしている。（ところが）渾沌だけにはこれらがない。ためしに穴をあけてやろう」と。（そこで）一日に一つずつ穴をあけていったところ、七日めに（七つの穴がすべてあいたら）渾沌は死んでしまった。

▼「皆」と「獨」に着目して読み、問題領域を見つけ、その問題領域について考える。
　本文読解後、考えたことの生徒まとめ。高１。

①一人一人、違いがあるので人間は皆「獨」であり、ある程度の共通性がある「獨」が集まって「皆」が構成されていると思う。「獨」の立場にいる少数派の意見も尊重されるべきだと思うが、複数の食い違う意見をすべて実現させるのは、現実的ではないし、そうなった場合、多数派であり、社会の土台というか、基本的な性質を決めている「皆」が優先されるのは、しかたない部分もあるのではないかと思う。

②個人の経験としては、昔人と違う考え方をする事が多かったけれど、他の人の一般的な意見や模範解答を聞いて、より自分をマジョリティーに近づけようとしていたなぁと思った。そのせいで、こんなおもしろみのない人間になってしまったのかもしれない。また、マジョリティーといえば「サイレントマジョリティー」という欅坂 46 の曲があるが、「皆」と「獨」の関係は、昔も今もとり上げられるんだなぁと思った。また、どこかで日本人はサイレントマジョリティーな傾向があると聞いたことがある様なない様な…。どちらにしても、小学校くらいの時からなぞの集団意識を感じてはいた。

③自分が思うに「皆」の一部になりたいと思う人も、「獨」になりたいと思う人も、世の中には沢山いるのだと思う。それは個人の性格によりけりだが、自分のあるべき姿、いるべき場所を考えてみた時、それぞれで望むものは違うんだと思う。今回、『荘子』「渾沌」を読んでわかったように「獨」でいることが大切だと言う人もいれば、皆の意見を聞いて、多数派つまり「皆」への帰属意識を持つ人もいる。様々な考えの人がいる中で、「渾沌」のように「皆」であることを押しつけられたらあるべき姿が迷走してしまい、消えてしまう。つまり、どちらか望まない方にあるよう強制されると自らの像が崩壊してしまうのではないかと考えた。決して「皆」でいなければいけないわけでも「獨」でいなければいけないわけでもない。個人的にはどちらにも順応できる柔軟な人間になりたいと思った。

④「皆」が常に正しいわけではなくて「皆」と「獨」どちらが正しいのかなんて分からない時もあるんだと改めて分かりました。だから、生活する上で他人を尊重するということを大切にしたいと思いました。また、「獨」の考えによって自分の考えがより深まると思うので「獨」の考えと自分の考えが繋がる部分はないかといことを意識して生活したいと思いました。

▼中３の場合
①「独」といっても、本当に一人の人間のことではないと僕は思う。例えば、何かについて多数決をとった時、少数派になった人たちも「独」になるだろう。しかし、その人たちの意見を強制的に変えることはできない。このように「皆」と違う個性を無理やり「皆」と同じにしようとしてもそれは不可能だといっているんだと思った。

②「皆」の善意だけで「独」の存在をなくして「皆」に取り込んでしまうと「独」は壊れてなくなってしまい、その一つしか存在しないことになる。「皆」が大部分が善意だと思ってやったことでも「独」にとってはそのままでいいと思っていたかもしれない。マジョリティーが全て正しいという考えは間違っているということを言っているのだと思う。

③無秩序な自然に人間らしさである「七竅」を加えたことで本来の自然がなくなってしまう的な…その人に悪意がないのに周りに悪影響をおよぼしているのはなんか悲しいですね。というかまず「皆」とか「独」っていって差別するのもどうかと思いますけどね。人間の中で「皆・独」を勝手にきめたとき、誰にそんな権限あるんだよって漢字ですよね。皆同じ人間なのに、と思うんですけどね。まあそういう考え方は根づいちゃってるのでなくすとかそういうことも無理だと思いますけども。理不尽って酷ですね。

④たとえば「皆」と違うことを好む子供に対して周囲の大人が本人のためを思って周りと同じになるように矯正しようとすることが本人にとって必ずしも良い事であるとはいえない、ということかな…？と思った。渾沌の死＝アイデンティティの死のような感じだろうか？　「皆」と違うのは良くないこと、というような意識に対してのいましめという意味なのだろうか…？

⑤「独」というのは決して悪いことではなく時にはそれ（それは物だったり人だったりする）をそれたらしめる個性が「独」であることもあるのだろうな、と思った。そして同じような環境下で作られたり育ったりしたものであっても、「皆」と同じ部分が多くなる一方で、必ず「独」も持ち合わせているはずだ。全く同じ人間が誰一人存在せず、全く同じ商品が何一つ存在しないことも、そういうことなのだと思った。

▼橋本陽介『使える！　「国語」の考え方』（ちくま新書、2019 年）

読書感想文では、「～しなければならないと感じた」「これからは～していこうと思った」「～してはいけないのだと思った」のように、小説文を読んで自分がすべき行動、してはならない行動が書かれるのがテンプレートのようになっている。

試みにインターネットで「読書感想文　書き方」などと検索してみるといい。すると、「題名を「ＸＸＸ（主人公）が教えてくれたこと」などとすると深く読んで書かれた感想だという印象を与えます」「締めには、読み終えて自分にどんな変化があったかを書く。「自分も主人公のように、信念をもって行動しなければならないと思った」など」というような「アドバイス」が無数に出てくる。書店に行って、「感想文の書き方」のような書籍を見ても、ほぼ同じである。こうした作文が評価されるのだろう。私自身も、読書感想文の書き方を教師に指導された記憶はまったくないが、なぜかこうした「教訓」的な感想を書いていた記憶がある。（20 頁）

▼山元隆春「発話行為としてのテクスト」（『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ』右文書院、1999 年）

次に掲げる文章は高校三年生の書いた「舞姫」に対する感想文の一節である（これは、いわゆる一読後の「初発の感想」ではなく、「舞姫」の授業を受けた後、その最終的な「感想文」として書かれたものである。）

> 時代が持つ価値観というのは本当に個人に影響し、個人を形作るということを知った。性格というのは、その人独自の、生まれながらのものは少なく、そのほとんどが環境から形作られているように思う。そうすると今の私の考え方も、少なからず時代がつくっているのである。そう考えると、人が自由であるという究極はありえるのだろうかと思った。親、生まれた国、時代、それらのすべてが生まれた時から決まっている。でもそれをみすえた上で、どう生きるかを考えることは大切なことだと思った。

この生徒は〈時代が持つ価値観〉と〈個人〉との関係を軸としながら「舞姫」というテクストを論じていこうとし、〈時代が持つ価値観〉を〈個人〉よりも重いものとして捉えようとしている。そしてそれが個人の〈自由〉の問題に関わるものだとした。ここで述べられている〈個人〉とは、直接には太田豊太郎のことを指しているのであろうが、右の感想文の内容からみるかぎり、この生徒は「舞姫」を、豊太郎という〈個人〉が、彼を取り巻く〈環境〉によっていかに構成されてきたのかということを語る物語として把握しようとしている。さらにこの生徒はそのことをふまえて、〈今の私の考え方〉もまた時代や環境によって形成されてきたのだとし、その上で果たして人々に究極の自由はあるのかという疑問を抱くに至った。

人間の性格はその人を取り巻く環境に規定される、という見解そのものはむしろ月並みなものであるとさえ言えるのかもしれないし、何ものにも束縛されない〈自由〉が幻想に過ぎないという認識も、けっして新しいものではない。しかし、たとえそうであったとしても、「舞姫」というテクストによってこの生徒の内部にもたらされた出来事がこの感想に物語られていることは確かだ。私たちが本当の自由を手に入れることができるのかどうかということは、「舞姫」が読者に対して呼びかける内容の一面にしか過ぎないのかもしれない。が、ここで感想文として表現された内容は、この生徒にしてみれば、「舞姫」を読むという出来事の中心であったに違いない。（27-28 頁）

四 〔古文・漢文古典知識・内容吟味〕

次の〔古文〕は「伊勢物語」の一節、〔漢詩〕は王勃の作品である。これらを読んで、後の問一、問二に答えなさい。なお、答えに字数制限がある場合は、句読点や「 」などの記号も一字と数えなさい。（計10点）

〔古文〕

昔、男、いとうるはしき友ありけり。片時さらずあひ思ひけるを、人の国へ行きけるを、いとあはれと思ひて、別れにけり。月日経ておこせたる文に、「あさましく、対面せで、月日の経にけること。忘れやしたまひにけむと、いたく思ひわびてなむはべる。世の中の人の心は、目離るれば忘れぬべきものにこそあめれ。」と言へりければ、よみてやる。

（仲の良い友人をもっていた）（いつも一緒にいて）（その友人が都から他国へ行ったので）（送ってきた手紙）（驚くほど）（たいそうつらく思っております）（会わずに）

目離るとも思ほえなくに忘らるる時しなければ面影に立つ

（離れているとは思えませんよ。あなたを忘れる時などないので、いつも姿が目に浮かんでいます。）

〔漢詩〕

送杜少府之任蜀州

城闕輔三秦
風煙望五津
与君離別意
同是宦遊人
海内存知己
天涯若比鄰
無為在岐路
兒女共沾巾

（注）＊少府――唐の時代の役職名。

〔現代語訳〕

友人の杜が少府に任命され蜀州に行くのを見送る三秦の地を従えてそびえ立つこの城門から、
風とかすみのかなたの五つの渡し場を眺めやる。
君と別れるこの気持ちを君は分かってくれるだろう。
二人とも各地を転々とする役人同士なのだから。
しかし、この世の中に本当に自分を理解してくれる者があれば、
その人とは天のはてほど離れていたとしても、隣にいるようなものだ。
だからやめよう。この分かれ道に立って、
女性や子どものように涙でハンカチをぬらすようなことは。

問一、SEE ALSO ――線を「為す無かれ岐路に在りて」と読むように、返り点と送りがなを書きなさい。（2点）

問二、思考力 高木さんたちは、〔古文〕をより深く理解するために、〔漢詩〕と読み比べ、意見を交わした。次はその一部である。これを読んで、後の(1)～(4)に答えなさい。

高木さん―〔漢詩〕の「沾巾」という動作には、別れの際の心情がよく表れていますね。

野上さん―〔古文〕では、動作ではなくて、「 I 」という一語に、見送る者の気持ちが表されています。

石川さん―どちらも、かけがえのない友人との別れをテーマにした作品ですね。その友人を、〔古文〕では「うるはしき友」、〔漢詩〕では「 II 」と表現しています。

高木さん―友人と心でつながっているから「天涯若比鄰」なのですね。かけがえのない友人を忘れることはなく、「 III 」ため離れているとは感じない、という〔古文〕の考えと共通しています。

野上さん―二つの作品を読み比べて、類似する表現を整理したり、表現や展開の仕方に留意したりすることで、作品の理解が深まりますね。

(1) I に当てはまる言葉として最も適当なものを、〔古文〕中から三字で抜き出して書きなさい。（2点）

(2) II に当てはまる言葉として最も適当なものを、〔漢詩〕中から二字で抜き出して書きなさい。（2点）

(3) III に当てはまる言葉として最も適当なものを、〔古文〕中から五字で抜き出して書きなさい。（2点）

(4) ――線について、〔古文〕と〔漢詩〕の表現や展開の仕方を説明したものとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。（2点）

ア、〔古文〕は、都から離れた者の心情に応えて和歌を詠んでおり、〔漢詩〕は、離れ行く者に対する自身の惜別の情を詠んでいる。

イ、〔古文〕は、見送られる者の視点から別れの場面を描いており、〔漢詩〕は、見送る者の視点から旅立つ者の悲哀を描いている。

ウ、〔古文〕は、時間の流れに沿って別れの場面までを記しており、〔漢詩〕は、別れの場面以降を時間の流れに沿って記している。

エ、〔古文〕は、さびれた風景を描いて別れの辛さを強調しており、〔漢詩〕は、雄大な自然を描くことで孤独な姿を強調している。

【コメント】

○b班より
「テニスについての知識」と「文章から入ってくる情報」との間には、何度も往復する矢印があるが、これはどのようなことを示しているのか。

○c班より
「文章に書かれていないこと」まで理解する上で、「題」が重要な役割をもっていることが分かった。

(1) a班では、【コメント】中のb班の質問に対して、次の【a班の回答】のように回答をすることにしました。空欄Ⅰ・Ⅱに当てはまる適切な表現を、それぞれ十字以内で書きなさい。（各2点）

【a班の回答】

本文で筆者が述べている、知識と情報のやりとりを示しています。そのやりとりとは、知識を使って（ Ⅰ ）たり、情報と（ Ⅱ ）たりすることです。

(2) 【コメント】中のc班のコメントのように、題が重要な役割をもっているといえるのはなぜですか。本文における筆者の主張を踏まえ、「推論」という語を用いて書きなさい。（5点）

三 (古文)内容吟味・仮名遣い

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（計10点）

恵心僧都(注2)は、修学(学問を修めること)のほか他事なく、道心者(仏教を深く信仰する者)にて、狂言綺語(注2)の徒事(無駄なこと)を憎まれけり。弟子の児の中に、潮夕(いつも)心を澄まして、和歌をのみ詠ずるありけり。「児どもは、学問などすることこそ、さるべき事なれ、この児、歌をのみ好みすく、1所詮なきものなり。あれ体の者あれば、余の児ども見学び、不用なるに、明日里へ遣るべし。」と、同宿(同宿の僧)によくよく申し合はせられけるをも知らずして、月冴えてもの静かなるに、夜うちふけて縁(縁側)に立ち出でて、手水(注4)使ふとて、詠じて云はく、

A 手にむすぶ水に宿れる月かげのあるかなきかの世にもすむかな

僧都これを聞きて、折節といひ、歌の体といひ、心肝に染みてあはれなりければ、歌は道心のしるべにもなりぬべきものなりとて、この児をも留めて、3その後歌を詠み給ひけり。

（「沙石集」による。）

(注1) 僧都＝僧の役職の一つ。
(注2) 狂言綺語＝道理に外れた言葉や飾り立てた言葉。詩歌の類いを指していう。
(注3) 児＝学問を修めたり行儀作法を身に付けたりするために寺院に預けられた少年。
(注4) 手水＝手や顔を洗い清めるための水。

1、1所詮なきものなり とあるが、恵心僧都がこのように思った理由として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。（2点）
ア、「この児」が学問以外のことをしないから。
イ、「この児」が和歌を詠んでばかりいるから。
ウ、「この児」が他の児のまねばかりするから。
エ、「この児」がすぐ実家に帰ろうとするから。

2、よくでる 重本 2使ふ の平仮名の部分を、現代仮名遣いで書きなさい。（1点）

3、3その後歌を詠み給ひけり とあるが、次の文は、和歌を「徒事」と捉えていた恵心僧都が、自らも和歌を詠むようになった理由について述べたものです。空欄Ⅰに当てはまる適切な表現を、現代の言葉を用いて二十字以内で書きなさい。（3点）

児の和歌に心を動かされ、（ Ⅰ ）から。

4、和歌Aについて、国語の時間にある班が話し合って解釈したことを、次のようにまとめました。空欄Ⅱ・Ⅳに当てはまる適切な表現を、それぞれ現代の言葉を用いて十五字以内で書きなさい。また、空欄Ⅲに当てはまる適切な語を書きなさい。（Ⅱ2点、Ⅲ・Ⅳ完答で2点）

この和歌には、月の様子と児自身のことが詠み込まれていると考えられる。そのように考えたのは次の二点の解釈からである。

① 「月かげのあるかなきかの世」という表現の解釈
月の姿がはかないということについて、この月は、（ Ⅱ ）ので、少しでも揺れるとその形がすぐに変わってしまうということを表しているといえる。そして、その月の姿のように、自分の周りの世の中も無常ではかないものだということが重ねられているといえる。

② 「すむ」という語の解釈
この語には、同音の二つの語の意味が重ねられていると考えた。その二つの語は、「澄む」と「（ Ⅲ ）」である。それぞれの語を解釈に当てはめると、前者は、月がはかない世の中でも澄んでいるということを表し、後者は、自分が（ Ⅳ ）ということを表すと考えられる。

四 条件作文 〈思考力〉

中学生の西山さんは、新聞で投書を読み、その内容について自分の考えを書いて同じ新聞に投書することにしました。次の【投書】は、西山さんが読んだ投書、【資料】は、西山さんが投書を書くために準備したもので、【ノート】は、西山さんがこれまでに読んだ古典作品の中で、印象に残った一節とその現代語訳を書き留めておいたものです。これらを読んで、あとの〔問い〕に答えなさい。（10点）